

**立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）**  
**大学院生研究**  
**2004年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院		文学研究科	地理学専攻
<b>指導教員</b>	所属・職名		氏名	
	立教大学文学部・特任教 授		大 森 元 吉 印	
<b>自然・人文の別</b>	自然	・ 人文	<b>個人・共同の別</b>	個人 ・ 共同 名
<b>研究課題</b>	「近代化」の進展と「伝統」の継承— 西インド・ナートドワーラー町の絵師集団			
<b>研究代表者</b>	在籍研究科・専攻・学年		氏名	
	文学研究科・地理学専攻・ 博士後期課程2年		八 幡 綾 印	
<b>研究組織</b>	在籍研究科・専攻・学年		氏名	
<b>研究期間</b>	2004	年度		
<b>研究経費</b>	200	千円		

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究の目的は、西インド・ナートドワーラー町に住む絵師集団および彼らの描く画が、今日どのような変化を経験しているかを、実施調査から明らかにすることにあつた。今日、貨幣経済の進展等によって、ヴァッラバ派の信者たちが、寺院に代わる絵師の画の買い手として新たに台頭している。最近15年ほどの間に顕著になったこの顧客の多様化は、画自体にも技法や価格の点での変化に加え、画の象徴的側面の変化も引き起こしてきた。申請者は、自らの研究データの考察より、おもに儀礼用として「信仰」というメッセージを絵師を含む当地の人々に強く伝えてきた絵師の画は、今日では、装飾性や芸術性という価値基準に基づいた即物的なメッセージをより強く伝えるように変化していったと主張したい。従来、当地における様々な儀礼的価値を象徴してきた壁掛け画は、グローバルな動きとの相互作用を通じ、新たな「再文脈化」を図りつつあるといえよう。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ 西インド ] [ 「伝統」 ] [ 絵師集団 ]

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

ナートドワーラーの町は、インド・ラージャスターン地方、メーワール県ラージ・サマンド郡に位置する。当地はヒンドゥー教ヴァッラバ派の本山であり、シュリーナート・ジー寺院(Shri Nath-ji Mandir、以下 SNM と略)がある。SNM においては、代々、バラモン出身の専門の絵師により、寺院を飾る壁掛け画が描かれてきた。本研究の目的は、門前町ナートドワーラーに住む絵師集団および彼らの描く画が、今日どのような変化を経験しているかを、実施調査から明らかにすることにあつた。絵師は、貨幣経済の進展あるいは中産階級の台頭のなかで、ヴァッラバ派の信者や都市の商人など新たな画の買い手を開拓し、彼らのためにも画を描いてきた。この傾向は近年とみに顕著になり、壁掛け画の一部は博物館やホテルなど、本来この画が飾られてきた目的とはまったく異なる場面で展示されるようになった。画の「商品化」傾向の増大である。今日では、画の低価格化・大量生産化が観察できる。

注目すべきは、道具や技法の変化に加えて、絵師自身が、当時の画の自己評価は繊細(nazki)であり、現在は派手(camak damak)になったという変化を主張していることである。絵師の画が派手になった理由として、門前店の絵師ジャグデーシュは、近年の客は一般に、飾りのない絵をあまり好まなくなっているからだと言った。近年の客は、ただ絵の大きさ、値段、飾り付けだけを見て買うことが多いという。申請者の聞きとりによると、絵師たちの多くは、このような急激な変化を、最近 15 年ほどの間になって顕著になってきたと認識している。従来、壁掛け画は、当地における様々な儀礼的価値を象徴してきた側面があることを考慮すると、ヒンドゥー行者の髪象徴性を論じたオベイセカル[Obeysekere 1981]が、象徴には個人的経験が深く関与していることを指摘した上で、象徴が公共のメッセージを伝えていることについて論じたことは興味深い。このような視点からみると、主に儀礼用として「信仰」というメッセージを絵師を含む当地の人々に強く伝えてきた絵師の画は、今日では、装飾性や芸術性という価値基準に基づいた即物的なメッセージをより強く伝えるように変化していったと見るのが可能であろう。

また申請者は、インド各地に点在するヴァッラバ派末寺のある地域(首都デリー近郊のマトゥラーおよびヴリンダーバン、グジャラート州アハマダーバードおよびブジ、そしてナートドワーラー近郊のカンクローリー)へ出向き、今日の絵師の画の流通状況に関する調査を行った。アハマダーバードのキャリコ博物館、デリーの国立博物館には 19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけてナートドワーラーの絵師によって描かれたとされる寺院を飾る壁掛け画が展示されていた。また、ブジでは実際のヴァッラバ派信者のお宅で壁掛け画が祭壇に飾られているのを確認した。しかしながら、こうした地域の末寺においては、アハマダーバードの末寺を除いては、ナートドワーラーの絵師の描いた画を確認できなかった。末寺において、今日注文・製作されているのはおもにその地域の仕立て屋集団が製作する刺繍やアップリケ製の壁掛けである。末寺に保存されているナートドワーラーの絵師の描いた壁掛け画はおもに 20 世紀初頭の時期に注文製作されたものであり、現在でも寺院に保管されているというが、申請者は確認できなかった。ナートドワーラーの絵師たちには、今日これらの末寺からの注文はほとんどないという。今日の寺院からの注文の減少という事態は、ナートドワーラーのみではなく、広域的な地域において起こっているのである。

この一連の変化の理由として挙げるができるのは、工場製品の普及等によって、筆や紙など既製品が簡単に入手可能になったことである。さらに、タイラング・バラモンの女性が述べるように、「現在は多くの絵師たちが生計の面で、寺院から独立するようになって」きた事情がある。貨幣経済の発展等のなかで、ヴァッラバ派の信者たちが新たな顧客として台頭してくるようになったのである。

## 研究成果の概要 つづき

庇護者としての寺院は、実質的側面において衰退傾向にあるのである。交通機関の発達（ナートドワーラーは国道八号線に通じている）で参拝客がナートドワーラーへより多く訪れるようになり、またご神体への供物が、寺院の雇用者を通じてより多くの信者へ、より活発に現金取り引きされるようになり、そして寺院を訪れる彼ら参拝客が、町のホテル、レストラン、土産物屋等へ現金を落としてきた。しかし、まさにこうした信者と現金の循環においては、寺院の儀礼・「祭り」のより外面的な側面は、信者をひきつけるものとして重要性を帯びてきた。その結果として、今日まで儀礼的に大規模なサービス授受関係が、寺院と絵師を含む諸サービス提供集団との間で再生産されてきたのである。寺院の重要性は、また別の形で補われてきたといえよう。

今日においても寺院は、絵師の画の「本来」の技芸を保存させる機能を担っている。また寺院は、絵師の名誉を表現し、社会的地位を再生産する機能をも担う。つまり、画の庇護者としての寺院の役割の縮小にかかわらず、そこには近年の様々な変化の過程で、庇護者としての権威を依然として保持している寺院という皮肉が観察できる。

寺院での壁画描きおよび壁掛け画描きのサービスにおいては、二〇世紀初頭より急速に普及したプリント画（本稿では、神の図像が印刷されたポストカードやカレンダー等の紙媒体を指すこととする）との競合をまぬがれ、絵師の「職域が保持」されてきた。なぜなら、ヴァッラバ派系寺院に飾る画は、代々聖画を描いてきた絵師の手になるものでなければ、信仰の対象とはならないとされてきたからである。この典型的な例として、聖都カーンクローリーの末寺の門脇にある、絵師の画を売る店をあげることが出来る。サナーディヤ・バラモンが店主であり、扱っている画の中にはタイラング・バラモンの画もある。しかし店主によると、タイラング・バラモンの絵師は、画を売ることは出来ても、絵師としての寺院への奉仕は不可能であるという。こうした状況に、ジャーティ間における「職域の保持」の一側面を見ることが出来る。職業的境界は、曖昧な側面を残しつつも、ある面においてジャーティによる規制を受けてきたのである。絵師の「職域の保持」は、非常に強固に寺院によって支えられてきた側面があったといえよう。

しかし、従来、寺院によって絵師の「職域」が強固に「保持」されてきた側面があったにしても、今日では絵師が自らの「職域」を「保持」していくことは困難になりつつある。なぜなら、今日の最大の顧客であるヴァッラバ

派の信者は、必ずしも絵師の手によって描かれた画にこだわっているわけではないからである。寺院において、今日でも世襲的な絵師の手により描かれた画しか使用しないとしても、すでに寺院に対するサービス自体が極度に縮小しており、絵師は今日、寺院への奉仕のみでは生計を維持していくことが出来ないのである。市場交換の領域が増し、信者や商人が新たな絵師の画の買い手として台頭してくるなかで、徐々に、絵師ジャーティの結束を高める「職域の保持」の解体は始まっていたのである。

これまで述べてきたことは、単純な「伝統」あるいは「伝統の変容」に関する記述というよりは、むしろそのような一般化が出来ない現実の複雑な諸相である。つまり、画を描くというナートドワーラーの町の絵師の実践は、様々な意味を生成するものとして、ときに当事者自身の「消滅の語り」の対象となり、ときに絵師自身の信仰心を表現するものとなり、あるいはまた、博物館へ展示されるような西洋近代的な「流用」の対象ともなりうるようなものである。ナートドワーラーの絵師の画がもつこうした様々な価値が、博物館や美術館、マーケットを中心とした場面において、単に「美術」や「芸術」という尺度によってのみ評価される傾向こそが、絵師たちが今日感じる変化の核心にあるのではなかろうか。